調　査　研　究

マッケンロートの人口理論 その紹介ならびに社会学的・人口学的検討 (4) (完)

皆　川　勇　一

目　　次

はしがき
第一章　表現理解としての社会学
1　意味理解について
2　表現の二つの側面
3　目的と表現
4　目的連関と表現連関
5　目的理解と表現理解
6　意味と因果性
7　意味連関の刻印力
8　<das Soziale>における表現原理の形而上学
第二章　人口様式の理論
1　史的社会学的人口理論
2　意味連関としての人口様式
3　人口様式と全体社会
4　人口様式と経済様式
5　人口様式の歴史的性格
第三章　西欧社会の人口様式
1　古い（工業化以前の）人口様式
2　新しい（工業化段階の）人口様式——その1　歴史的考察
3　新しい人口様式——その2　現代的考察
4　新人口様式の構成要因
(1)生理的要因　(2)性および家族倫理　(3)社会制度的要因　(4)個人的要因　（以上第85号）
第四章　人口と経済
I　工業化以前の資本粗放的経済における人口と経済
1　純粋の農業段階
(1)　経済人口学的方程式（理論的設定）
(2)　Urarmut の段階（経験的考察　その1）
(3)　工業化以前のヨーロッパ農業の段階（経験的考察　その2）
2　原初的な工業的上層部分の成立

Ⅱ　工業化段階の資本集約的経済における人口と経済
1　資本集約的経済における人口（理論的考察）
(1)　人口の増加圏
(2)　あい路問題
(3)　古いかみ合わせの解体
(4)　技術発展と労働力排除
(5)　組織行政部門の肥大化
2　ヨーロッパの人口増加の波の経済的基礎（経験的考察）
(1)　農業生産性の上昇
(2)　工業的上部構造への人口吸収
(3)　海外移住と輸出産業の形成
(4)　ヨーロッパの出生曲線の転換――人口学的空洞の形成
Ⅲ　将来の人口すう勢　（以上第86号）
第五章　マッケンロート人口論の社会学的・人口学的検討
Ⅰ　表現理解をめぐる諸問題
1　Dilthey およびドイツ西南学派における社会文化認識
2　Max Weber の理解社会学
3　表現理解の立場・発想の源泉
4　表現理解の検討
(1)　Georg Weippert の所説
(2)　Werner Ziegenfuss の所説　（以上第87号）
(3)　表現理解の社会学的諸問題
(4)　表現理解と人口様式
Ⅱ　マッケンロートの人口論
1　人口様式の理論
2　西欧社会の人口様式
3　人口と経済
補録：マッケンロートの著作目録　（以上本号）

（3）　表現理解の社会学的諸問題

Dilthey 以来の理解的方法の強調とその理論的発展過程の内で，マッケンロートの表現理解の立場がどのようにして形成されて来たかはすでにのべた。自然科学的量化主義に対する意味理解の主張は，マッケンロートのばあい，意味の非合理的表現的側面の把握および意味の全体的 Gestalt からの把握を中心とする表現理解として結晶し，表現と様式とを基本範疇とする社会的生の形式とその客観態の表現内容の解明が，彼の理解社会学の課題をなすことになった。

この表現理解の立場につき，まず社会事象の意味理解ということから検討してみることにしよう。いわゆる sinnblindな 自然科学主義（計量主義，自然因果への社会的因果の還元）に対する意味理解の強調が，社会現象の異質性および社会科学における独特な（それは主にドイツ的な伝統として形成されたものではあるが）認識論的立場や範疇法則を顧慮しない無遠慮な自然科学的方法の侵入に対する警戒危惧に発していたことは前述の通りであった。だがこのような危惧がまったく単なる杞憂とのみは言えなかったにしても，社会現象の実証的な調査研究における研究手段としての量化的方法のも

つ意義が非常に大きなものであったことは否定され得ない事実である。自然科学的方法の導入をめぐる方法論論争が，方法論に対するドイツ的思惟（学問論偏重）とアメリカ的思惟（研究法論偏重）との喰い違いにもとづくものであったことは注91ですでに指摘した。

もっともマッケンロートの計量主義に対する批判においては，学問論と研究方法論との機能区分は一応は意識されていたように思われる。少なくとも研究手段の問題としてそれを考える限り，自然科学の量的精密的方法は，今日の社会科学における研究方法—実験・統計・調査・分析法等—の発達に大きな貢献をなして来ているが，いわゆる内省的理解的方法の意義は，Dilthey 的な哲学理論の内においてはともかく，社会学の方法としては，実証的な調査統計や資料蒐集の方法技術の発展にともないその意義を相対的に減じつつある。Weber が，その社会学において理解的方法を強調した社会的行為の研究においても，アメリカにおける行動研究にみられるように，さまざまの調査手段はもとより実験的方法さえもが，発達するに至っているのである。理解が研究方法として重要な意味をもっているのは精神病理学的診断などのばあいにのみ限られている。むしろ現在では，研究手段としての当否そのものより，このような量化的実験的研究方法の社会科学への導入の多くが，社会科学的な範疇や法則との関係の充分な理論的検討をへずに行なわれていることが大きな問題となっている。

マッケンロートの批判も，自然科学的方法の研究手段としての意義を否定するのではない。たとえば彼は，行動主義の意味に盲目な自然主義を批判し，科学的方法としての行動主義の行動主義的社会哲学化を否定したが，その行動把握の方法自体は高く評価し，行動の表現事実は Weber 的な合理主義的アプローチによってはとらえられずむしろ行動主義的方法によってのみとらえられると考えた。また，それ自体は sinnblind な統計も，内的生の意識されない表現事実の観察という点では，意味の解明に対する有効な方法的意義をもっており，それ故人口統計学は人口論の補助科学としての役割をもつと説いている。（注12参照）だが研究様式（学問論）と研究手段（研究方法論）との本来的相即を考えるとき，いわゆる sinnblind な行動主義や人口統計学などが，何故そのまま研究手段として表現理解の理論に結びつきうるのか。彼が自然科学的思惟の社会科学への侵入の危機を深く強調するだけに，またその批判が自然主義的思惟の多くの弱点を鋭くついているだけに大いに気にせざるを得ない。だが残念ながらこの点については，彼はなんらの理論的顧慮をも払ってはいない。

さてつぎは表現理解についてである。マッケンロートの表現理解の立場は，Max Weber 的な合理主義的原子論的アプローチに対する批判として形成されたものであり，意味の表現的側面と社会的生の形式の形態的統一とを強調する表現理解の主張は，Weber 社会学の欠陥をするどくつくものであった。Weber 社会学に対する有力な批判者である Alfred Weber の文化社会学および Talcott Parsons の社会体制の構造機能的把握も，その批判の基本点においてはマッケンロートと見解を同じくしているのである。だが一面における彼のこの正当な問題提起は，それのみが余りにも一面的に追求強調されたために，逆にマッケンロートの立場の弱点を形成するもととなった。これはさきの Weippert・Ziegenfuss の批判にもうかがえる所である。

Weippert および Ziegenfuss のマッケンロート批評は，それぞれ視角をいちじるしく異にしてはいるが，その批判点は根本においてむしろ非常に接近しているといってよい。彼等にとって表現理解の立場の問題点は，結局，その合理的なものの軽視排除・過度の非合理主義への傾斜にあった。

Dilthey 以来の理解の立場を固持する Weippert のばあい，批判はまずマッケンロートにおける意味と理解という理解社会学の基礎範疇の誤った拡大解釈の検討からはじまっているが，マッケンロートのこの逸脱は，社会的行為における無意識的側面の重視，その合理的な目的層と分離された非合理的な表現部分の重要性の一面的な強調と表裏をなすものであった。そしてさらに ≪übersubjektivis-

che Seelisches≫ の形而上学的措定も，社会・歴史・文化をもっぱら霊的なものの表現として，いわばその無意識的非合理的側面のみを強調する表現理解の立場の論理必然的な随伴物であったと考えてよい。もっとも Weippert のように，これを客観的精神の範疇にすりかえることによって，マッケンロートのディレンマが直ちに克服できるとは考えられないが，マッケンロートが考えるような超主観的（社会的）表現分野が存在するからといって，それを das Geistiges の対極としての das Seelisches にのみ結びつけねばならない理由はない。この点では übersubjektivische Seelisches の措定を，Klages の非合理主義的な表現理論へのマッケンロートの傾倒が生んだ誤まりと考える Weippert の批判は正しいといえよう。

Ziegenfuss もこのマッケンロートの非合理主義を真向から，Weber 的合理主義との対照において把え批判する。彼の批判は，マッケンロート的指向の対極としての合理主義的側面が現代社会において占める比重の大きさを我々に思い返させてくれるし，またそこには，マッケンロートの表現理解の理論における，Weber とは逆の偏倚から生れる危険性がするどく指摘されている。

Weippert および Ziegenfuss によるこのような批判は，マッケンロートの表現理解のアプローチの限界をたしかに正しく把えているといえよう。

だがこうした批判を措いて，表現理解の立場をそのまま容認するとしても，なお表現理解の理論構成の内部にもさらに多くの問題点が存在する。人間行為における目的内容ではなく，表現内容，つまり目的達成の鋳型の領域こそ，社会学のより重要な対象であるとするマッケンロートの指摘は，Weber 的な思われた意味のみを対象とする行為の合理主義的理解の限界を正しくついてはいるが，それでは一体行為のこの意識されない表現部分をどのようにして把握すべきかという問題に対するマッケンロートの解答は，理論的に充分成熟したものとはいいがたい。表現理解の対象とすべき領域が，単に目的合理主義的側面に対する表現的非合理的側面という対極論的把握によってのみ規定されているというあいまいさを一応措くとしても，マッケンロートが，この表現部分を把握するために準備した表現理解，あるいは，Weber 的な動機因果性による行為の表面的理解に対し真実の意味関連をとらえるために設定した意味因果性，といった範疇も，それによって彼が表現しようとする比喩的意味合いは了解できるにしても，理論的範疇としてはなお不充分で，Weber の gemeinte Sinn および動機因果にはくらぶべくもない。この点においては，マッケンロートが，その批判の対象とした Max Weber の理解社会学における厳密精緻な科学論的構成に逆にまなぶべき多くのものを残している。

このような理論構成の未成熟に加え，マッケンロートの立場を決定的に不利に導くものは，Weippert によっても批判されていた≪übersubjektivische Seelisches≫ の形而上学的措定であろう。彼の Weber 批判の第一点は，社会学的行為の合理主義的把握であったが，さらにその原子論的社会把握がそれにおとらぬ重要な批判点であった。すなわち社会は Weber のように原子的個人の個々の行為の動機因果的把握によっては決して把えられることはなく，むしろ社会全体の形態的統一の把握によってその真実の意味把握が可能となるというのがマッケンロートの基本的考えであった。様式の範疇はかくて表現理解の社会学にとって，表現とならぶ基礎範疇となるわけであるが，この社会全体の形態的統一＝sozial Stil を成立せしめるものとして übersubjektivische Seelisches をば必要不可欠の形而上学的措定と考えたのである。

だが社会の形態的統一を明らかにしようとする様式科学にとっては，社会様式・文化様式の具体的形態およびその成立過程の経験的確定と解明こそが本来の課題なのであり，übersubjektivische Seelisches の形而上学的措定は，経験科学的説明には何等積極的寄与をなすものではない。

彼が動機的因果にかえて設定した意味的因果性を可能にする意味連関の刻印力の問題は，個人のば

らばらの行為から如何にして統一的行動様式が成立するかに関する興味深い説明仮説であり，また社会的形式の様式としての成立，様式同化・構造類似の問題も，社会科学の認識論的基本問題・社会科学的法則の基本性格にかかわる重要な問題領域ではあるが，それらもマッケンロートのように übersubjektivische Seelisches によって説明さるべきでなく，経験科学的に，すなわちそれぞれの行動様式成立の具体的事実の確定とその検討の上に論ぜらるべき問題である。こうした問題についてはこのような経験主義的アプローチ以外はまったく意味がない。社会の全体的意味把握という，マッケンロートのそれ自体としては重要な意義をもつアプローチも，社会様式あるいは文化様式の様式化の安易な形而上学的説明によってむしろかえってその理論的意義をいちじるしく減じているといってよい。だがこのような形而上学的措定を余儀なくした原因は，社会様式の表現的側面のみに執着する彼の過度の非合理主義にあったことも見逃がせない。

以上の通り，マッケンロートの表現理解の立場は，それが Weber 的な合理主義的原子論的社会把握の欠陥に対する正当な批判的視角の上に展開されていることに大きな意義が認められるが，なお多くの理論的未熟さをふくんでおり，とくにその過度の非合理主義的態度に対しては厳密な批判検討が加えられねばなるまい。

（4） 表現理解と人口様式

さて以上のような多くの問題点をはらむ表現理解の社会学と彼の人口研究がどのような結びつきをもっているかについては，すでに第二章で説明したところである。ここで簡単にそれを繰返すならばつぎのようなことになろう。

人口過程はすべての社会的大量事実と同じように，それに参加している個々人には意識されることはない。ところがこの人口過程を構成する人口学的諸要素のうち，婚姻・出生・死亡など一つの人間集団の生殖過程を決定する諸要素の背後に存在するもろもろの行動様式（家族制度・結婚の仕方・子供の生み方など）のあいだには，相互に有意味な仕方での調和があり，マッケンロートのいわゆる意識されない一つの表現連関を形成している。このような表現連関を形成しながら，一つの人間集団の生殖過程を規制する生殖に関する行動様式の歴史的共同作用を，彼は人口様式あるいは生殖構造とよぶのである。

ところで，彼は人口過程がそれをになう個々人にとってまったく意識されない過程であるにもかかわらず，このように一つの人口様式が社会的に成り立つのは，生殖構造に関する行動を様式化せしめる黒幕としての übersubjektivische Bildmächte の作用にもとづくものであり，この Bildmächte の刻印力によって，個々人の行動はかれのすべての意識の凝装の下で，一つの人口様式のうちに意味保有的に鋳込まれるからにほかならないと考える。それ故人口過程はまさしくかれの表現理解の好個の適用分野となる。表現と様式という彼の理解社会学の基本範疇のもとにすえ直された，人口過程の史的社会学的理論としての人口様式（生殖構造）の理論がここに成立する。

かくてマッケンロートにとって，人口研究は表現理解の立場の有効性を吟味すべき試金石だった。彼の人口研究は表現理解としての社会学の実証部門の一つに外ならない。そしてこの表現連関としての人口様式という基本的設定のいわば理論的系として，人口法則は何等因果的性格をもたない相貌学的な構造合法則性であるという考えや，人口様式と全体社会，あるいは，人口様式と経済様式との関連を構造類似あるいは表現類似としてとらえる彼独得の把握が生れることになる。これらの主張は，人口法則というものの性格および人口と全体社会あるいは人口と経済との関連に関する基本的認識にかかわる問題でもあるが，彼の人口法則に関するこのような把握は，社会法則一般に関するマッケンロート的理解の一つの適用にほかならず，それが表現理解の社会学的範疇設定の枠内において成立して

いる以上，表現理解の立場の厳密な社会学的検討の場において併せて論究されるべき問題であろう。またこの問題の根本的究明のためには，人口過程において成立する表現連関としての人口様式だけではなく，他の社会・文化領域をもふくむ社会的形式全体における様式とその表現内容の検討比較が必要である。しかしながら，筆者は現在これらの基本的諸問題に立ちむかうだけの理論的，実証的準備をもたないため，ここでは彼の社会学と人口研究との連結の要石をなす人口様式の性格について，若干のコメントをのべるにとどめておく。

マッケンロートがいうように人口過程はそれをになう個々人には意識され得ないものであり，とくに彼がいうような人口様式の表現連関は，すくなくとも“gemeinte Sinn”にはぞくしないことはあきらかである。一般的にいって，Weber のようにあくまで個々人の社会的行為から出発する立場とはことなり，社会的な行動様式（慣習制度）を問題の中心におくマッケンロートの理論設定自体が，行為に関する個人の主観的目的的意識のレベルをすでにこえているとも言い得る。だが彼が考えるように人口様式はつねに表現連関としての意味しかもたないだろうか。とくに近代産業社会における neue Bevölkerungsweise のばあいはどうだろうか。彼のいわゆる alte Bevölkerungsweise においては，生殖構造に関連した行動様式は，その Hufe 体制という経済様式との密接な関連において成立した社会制度や社会・文化規範によってきびしい規制をうけており，表現連関としての意味合いが強かったといえよう。ところが neue Bevölkerungsweise のばあいには，たとえそれが人口過程のすべてを支配するには至っていないにしても，すくなくとも結婚後の出産は，個々人の主観的意識的な出産計画とむすびついたものであり，むしろ目的連関としての側面が非常につよまったと考えられる。とくに出生率を安定させるための人口政策・社会政策がとられるばあいには，人口過程全体にかなりの目的的統制の力がくわわることになり，人口と社会全体，人口と経済との関係もそれとともにその性格を変えるはずである。このような人口様式の歴史的性格の転換の内で，人口法則の相貌学的性格，あるいは人口と社会・経済との表現類似といった把握の再検討が必要なのではなかろうか。マッケンロート自身現代はますます formloser, ausdrucksleerer な社会に変りつつあると考えたが，何故かこの点の検討を行なってはいない。それはすべての社会事象を特定の史的社会学的局面にむすびつけて把握すべきことをとく，彼の歴史主義的立場にも矛盾するものではなかろうか。

II　マッケンロートの人口論

以上マッケンロートの人口理論の社会学的基礎をなす表現理解の立場について，その先駆をなす諸理論との関係をまず明らかにし，つぎに表現理解および表現理解によって基礎づけられた人口様式研究の社会学的意義と問題点について考えてきた。最後にいよいよこの表現理解の立場によって底礎されたマッケンロートの人口論，すなわち人口様式の理論とその西欧社会への適用の人口学的な意義について検討することにしよう。

1　人口様式の理論

マッケンロートは，自己の人口研究を，特定の歴史社会的局面における人口様式に関する研究として規定した。彼のこの規定の背景には，彼の人口論を特徴づけているいくつかの重要な論点が存在しているが，それらは結局つぎの二つの主張――その一つは批判的論争的なものであり，いま一つは彼自身の立場の積極的な展開を意味する――に包括されていると思われる。その第一は人口統計的アプローチに対する批判であり，第二は人口法則は史的社会学的法則であるとする史的社会学的人口理論の提唱である。この二つの主張が，結局は，いわゆる意味問題を無視する自然主義的思考に対する批

判にその共通の根をもっていることは，後に明らかとなろう。

さて以下これら二つの注目すべき発言を手掛りとして，マッケンロートの人口様式の理論を検討してみることにする。

まず第一の主張について。マッケンロートの人口統計学的アプローチに対する第一の批判は，それが sinnblind であるということであった。sinnblind な人口の統計的研究とマッケンロートの人口把握とはどこが違うのだろうか。人口様式という独得の範疇の設定を中心として展開されるマッケンロートの人口研究の内実は，素材的には，第二章でも明らかにしたように，いわゆる Demographer の研究と差違がない。彼が生殖構造（＝人口様式）の生物学的・社会学的構成要因として列挙するものは，人口統計学における人口動態の諸要因と内容的にはなんら変りなく，ただ流出流入すなわち移動が除外され，生殖構造という範疇にふさわしい婚姻出生死亡に関する諸要因だけが残されている。[101] 人口統計的アプローチとの違いは，彼のばあい，問題はこれらの諸要因の統計的数値そのものではなく，その背後に働らいている一つの集団の生殖構造に関連した行動様式にあることである。しかもそれらの行動様式のあいだには，つねに一つの有意味な意味連関が成立している。それ故これらの構成要因は個々ばらばらに取扱わるべきものではなく，内的な構造合法則性をもった人口様式として全体的に把握されねばならないことになる。人口動態的諸要因の個々の変動を追及する単なる人口統計的研究によっては，この点は明らかにはされえない。

人口過程を特定の社会集団[102]の生殖構造に関する行動様式の綜合作用から把え，そこに人口様式という一つの範疇を設定したことは，マッケンロートのすぐれた創意であり，ここに彼の人口研究が同じ人口統計学的素材から出発しながら，いわゆる形式人口学的な人口分析とはことなる一つの社会学的な人口理論となり得た理由がある。

人口過程を構成する婚姻，出生，死亡などの諸要因は相互の間の有意味な連関において組み立てられた全体をなしているが，この全体的意味連関はそれらの諸要因を個々ばらばらに研究する sinnblind な人口統計学的アプローチによっては把えられないということが，人口統計学に対する第一の批判点となったが，さらに彼の人口論における主張の第二点との深い関連において第二の批判が提起されることになる。それは，人口統計的アプローチが人口過程の統計的分析あるいは若干の人口統計的要因を前提にした人口学的モデル理論の形成にのみ終始し，現実の人口過程と深い関連をもち，それを規定している特定の歴史的社会的局面を完全に無視してしまうことに対する批判である。すなわちマッケンロートによれば，人間社会の現実の人口過程を直接決定している支配的条件は社会学的条件すなわち人間の行動である。しかるに統計的人口理論は，この人口過程を規制する社会的条件を考慮に入れず，純粋に人口統計的な条件の上にのみ理論を展開する。だがそれはまったくの思考の構成物にすぎず，現実の人口過程を支配している諸法則を明らかにすることはできない。現実の人口法則は，つねに一定の歴史的社会的局面における特定の人間集団（民族・階層）の生殖に関する行動様式の歴史的共同作用の検討によってのみとらえることができる。「人口統計学は，このような問題設定の観点の下で，社会過程を明らかにするための補助科学にすぎない」。（Bevölkerungslehre 12ページ）マッケンロートのいわゆる史的社会学的人口理論の主張は，それ故徹当徹尾自然主義的思惟に毒された人口統計的アプローチへのアンチテーゼをなしている。

以上のようないわゆる Demographic Analysis[103] に対する批判は，自己の論点をするどく浮彫りするための彼一流の対極論的設定により，いささか苛酷に失するきらいがないでもないが，人口統計的アプローチの考慮すべき理論的・実際的問題点のいくつかを正しく把へているといえよう。

たとえば生殖構造の構成要因である婚姻・出生・死亡を，個々ばらばらにとり扱かわず，一つの全

体として，その歴史的現実における組合わせを検討するといった指摘は，それを一つの表現連関とみなす表現理解の立場に立たなくても納得しうる有意義な指摘であるし，しかも人口統計学的観点からでは，なかなか気がつきにくい盲点といえる。また 注102）に指摘したように，人口統計的分析を，特定の生殖構造をもつ社会学的に同質な集団を単位として行なうべきであるという指摘も，国全体あるいは行政区域といったものを分析単位としがちな統計分析に，有意義な反省材料を提供するものであろう。

これらの実際的にも有意義な指摘にくわえ， Demographer にもっとも重要な反省を強要するものは，人口様式という範疇設定の上に立ったマッケンロートの人口論がもつ，人口過程の実質的な説明理論としての意義であろう。すなわちそこには， Demographic Analysis のつみ重ねのみからはかならずしも生れえない，人口現象が歴史的社会の内でもつ実質的意義への探究が存在することである。それ自体が一つの実体理論をなすよりは，むしろ方法学ともいうべき，用具的色彩のつよい統計学的理論の内で，いわゆる Demography は，現実過程の量的抽象としての人口を対象とする上に，さらにこの抽象作用に由来する資料的制約により，いちじるしく形式的な性格をおびざるを得ない。そしてそのような人口現象の形式的分析のみからは，人口現象の社会過程における内実的意義をつかむことはむずかしい。人口統計学のこのような制約のゆえに，純粋デモグラフィの説明科学としての独自性については多くの問題性を残していると見る論者もある[104]。もちろん純粋 Demography が背負うこれらの諸制約は，何等その科学的意義を減少せしめるものではなく，人口過程の直接記述ならびに分析部門としてのその人口研究における意義は大きい。だが，それが人口過程についてなんらかの実体的説明に向おうとするとき，その形式性を克服するためにさらに必要とされねばならない Frame of Reference のすくなくとも社会学的局面における一つの見本を，マッケンロートの人口論は示しているといえよう。

さてマッケンロートの人口論は，いわゆる Demographic Analysis に対する以上のように痛烈な批判から出発しているが，人口研究の他の立場が彼の批判の眼から免れているわけでは決してない。史的社会学的人口理論の提唱は，彼に先行する一連の人口研究に対する批判的観点と密接な関連をもっている。

まず彼は自己の人口研究の立脚点を示すものとして人口過程の歴史社会的規定性を強調するが，これは意味理解の強調とならんで，人口論の領域に侵入した彼のいわゆる自然主義的思考様式批判の基本的視角をなすものであった。人口論の第4章 Bevölkerungstheorie 第1節 Geschichte der Bevölkerungslehre は，人口研究における先行諸理論に侵入した自然主義的思考様式の摘出と批判を中心に展開されている。ここで彼が一貫して強調することは，人間を，つねに特定の歴史的社会的位置づけをもった社会的存在として，また生殖過程をこのような社会的な存在によって荷われている社会的過程としてとらえることであった。このような観点に立つ彼の批判は，自然主義を最初に人口研究のうちに持ち込んだ Malthus や生物学的理論における，社会過程としての生殖行動を生理的過程としての繁殖過程にすりかえてしまう生物学的自然主義だけではなく，賃銀鉄則や Zeugungsoptimismus の上に立つ社会主義人口理論の社会的自然主義，さらには歴史社会的規定から切り離された福祉や Gesinnung によって人口現象を説明しようとする福祉説や理性論者（Gesinnungstheoretiker）にまでおよんでいる。

ところで人口過程をつねに特定の歴史社会的局面においてとらえようとする彼の態度は，人口法則を史的社会的法則としてとらえようとする史的社会学的人口論として結実することになった。何故なら特定の歴史社会的局面において成立する人口様式を直接規定するものは社会学的諸要因（人間の行

動）であると彼は考えるからである。彼が人口過程に影響をおよぼす条件として考えていたのは，経済的・生理的・社会的の三つの局面であった。だがこの内，まず経済は人口過程が全体として適応すべき状況（Situation）として直接の決定要因から除外され，つぎに生理的条件も，たしかにそれは人口過程を規制する直接要因にはちがいないが，その変化の幅は少なく，現実社会の歴史の内では，人間の生殖能力や寿命などの限界を規定するゆるやかな生物学的枠として機能するだけであり，人口過程の歴史的変化に対する影響は少ないとされた。結局現実の歴史社会的局面における人口過程を直接決定するものは，むしろ社会学的条件，つまり生殖構造に関係した人間の行動であり，この歴史社会的な現実性を荷った行動の内にこそ，現実の人口過程およびその歴史的変化の説明のカギがあると彼は考えたのである。ここに Malthus, Mombert とは決定的にことなる彼の社会学的人口理論の立脚点が形成される。人口様式の理論としての彼の社会学的人口論は，表現理解という基礎理論的視角によって基礎づけられながら，さまざまな自然主義的思考の歪曲を排除しつつ，あくまで特定の歴史社会的局面においてとらえられる人口過程に関するこのような現実的把握のもとに展開されたのである。

彼の史的社会学的人口理論の意義と問題点の具体的検討は，つぎの西欧社会の人口様式の検討とあわせて行なうことにしたい。

なお彼の社会学的人口論を支えている，いま一つの理論的基礎として，人口と経済との関連に関する，いわば人口論的伝統をなす Malthus 的把握の批判の上に立つ，彼のすぐれた社会学的把握をあわせて考慮する必要がある。この人口と経済との関連に関する新らしい把握こそ，彼の人口理論を Malthus, Mombert と決定的に区別する理論的分岐点をなすものと考えられるが，この点は最後の人口と経済のところで説明する。

〔注〕101） ただしこのうち，マッケンロートの考える生殖構造に関連をもつ行動様式に，本来的な関連をもつものは，婚姻出生であり，死亡は堕胎とか棄老・嬰児殺しといった特殊なばあいにのみ人間の社会的行動様式にむすびつき，社会的生殖構造の問題に入るほかは，むしろ Situation として，その変化が間接に生殖構造に影響するだけである．

したがってマッケンロートの人口様式は，本来は結婚と出生をば重要な変動要因として成立することになる．事実 alte と neue の二つの歴史的人口様式も，前者は婚姻，後者は出生が変数となることによって成立したのである．

102） このような生殖構造を統計的に把握するばあい注意すべきことは，それが社会学的に同質な集団を対象にしたばあいに純粋明瞭に把握できることである．ことなる生殖構造をもつ異質的な集団を一括した統計分析では，それぞれ意味のことなる人口学的値が平均化され，社会学的合法則性が抹消されてしまう．したがって国全体の統計数字は，なかなか歴史的人口様式を純粋な形で表わさない．この点に関する，また人口様式一般に関する詳細かつ平易な説明としては，Mackenroth の論文：Die generative Struktur von Bevölkerungen und Sozialschichten, Weltwirtschaftliches Archiv, Bd, 75, Heft 1, 1955, SS 1～18,：を参照．

103） この表現は P. M. Hauser & O. D. Duncan 編：The Study of Population から借用した．ここで Hauser と Duncan は人口の大きさ・地域分布・構成とそれらの内で生じた諸変化およびこれらの諸変化の諸要因，すなわち，出生・死亡・地域移動（Migration）・社会的移動（Change of Status）などの研究としての Demography を，人口の variation および変化の諸要因の研究としての Demographic Analysis と，人口の変化と他の変動すなわち社会的・経済的・政治的・生物学的・遺伝的・地理的などなどの諸要因との関係の研究としての Population Studies の三部門に大別している．(Study of Population 2～3ページ）いわゆる人口統計学的分析はここでは Demographic Analysis の同義語をなす．またこのような区分にしたがえば，マッケンロートの人口論は，社会学的な frame of refe-

rence にならって Population Study の一つの試みということになろう。

(101) 形式的な人口学（demography）の理論的性格については，中島氏のつぎの論文によるところが多い。
中島龍太郎：人口研究体系化の1課題，人口問題研究所年報第5号，昭和35年。

2 西欧社会の人口様式

さて上述のようなもろもろの野心的主張の結晶ともいうべき人口様式の理論の効用や如何。それは現実の人口過程をどれだけ鋭どく把握し，どれだけ深く説明できるだろうか。史的社会学的人口理論の立場に立つマッケンロートの人口研究の現実的課題は，西欧社会の歴史的発展の局面において実現された人口様式の解明であった。それは西欧社会の今日の人口様式であるのみならず，工業化の全世界への侵透とともに，他の非ヨーロッパ的世界の人口様式をも改鋳しつつあり，かくて西欧的人口様式への世界的統一順化が実現しつつあるという意味でもまことに重要な意味をもっている。

Bevölkerungslehre の第二章および第四章で，彼は本来の課題である工業化段階の人口様式にふれる前に，それと対照的な工業化以前の人口様式を描き出し，つぎに西欧社会の工業的発展とともに生じた人口現象の変化（近代的人口増加の波，人口動態の二重シェーレ等）の内から新しい人口様式の形成をつきとめ，逆にこうした人口現象の近代的転換を，古い人口様式から新しい人口様式への転換によって説明している。この手並はまことにあざやかという他はない。

マッケンロートの以上の所論のうち西欧社会の工業化と共に生じた人口現象の転換過程および新人口様式については，ここで何等その経験的基礎について論ずる必要はあるまい。何故ならそれは18世紀以降の豊富な人口統計的資料によって充分確認追証し得るものだから。西欧社会において新人口様式がどのようにして形成され，それがさらに西欧以外の地域にも侵透しつつあるかは，マッケンロート自身が Bevölkerungslehre の第二章で，おどろくほど豊富な人口統計資料ならびに文献を駆使して，ほとんど全世界について実証ずみのところである。マッケンロートのこの実証が他の人口学者の所説ともほとんど喰い違いをもたないことは，たとえば近代化とともに生じた人口現象の変化の統計的観察の上に形成されたアメリカの Demographic Transition Theory などを参照することによって容易に理解できる。

だがマッケンロートのあざやかな論証の発端をなす alte Bevölkerungsweise についてはどうだろうか。信頼するに足る人口資料の乏しい中世の人口様式を確定するための実証的論拠を，マッケンロートは何処から見つけ出したのだろうか。マッケンロート自身その Bevölkerungslehre の内では，Bevölkerungsweise という範疇の発想の源泉についてほとんどふれてはいない。だが結婚率と結婚年令を通しての人口の扶養空間への適応を中心とする工業化以前の古い人口様式ならびにその解体に関する実証は，Gunther Ipsen，および Conze を中心とする Göttingen 学派の人々—Haufe, Linde, Buchholz, Köllmann, Rothe 等—によるドイツおよび東欧諸地域の人口史ならびに社会史的研究によって行なわれており，[105] generative Struktur の概念も，すでに Göttingen 学派の一人 Linde によって素描されていたといわれる。マッケンロート自身も，Ipsen の論文が彼の考を大いに稗益したとのべているが，[106] 筆者はこれら諸論文を手にする機会を得ないため，残念ながらこれらの先行的諸研究が，マッケンロートの人口様式理論の形成にどのような形で寄与したかについては明らかにすることができない。しかしながら，マッケンロートの alte Bevölkerungsweise の構想が，彼の独創ではないにもせよ，決して事実の裏付けをもたない空論ではなく，沢山の実証的事実の上に形成されていることだけは明らかである。

したがってその実証的基礎からすれば，マッケンロートの分析は，西欧社会における近代化に伴う

人口学的転換の事実を正しくふまえたものであるといえよう。また全世界全階層にわたる neue Bevölkerungsweise への人口学的改鋳統一作用の進行という主張も，一応現在までの人口学的事実のうちには，これから大きく外れた発展を示すような事例は少ない。

もつとも彼のばあい，人口現象にみられる近代的転換の現象的事実そのものに目をむけそれを実証することが目的だったわけではなく，むしろその背後に，そのような転換をうながした社会経済的諸変化の総過程と密接な関連をもつ人口様式の歴史的転換をとらえたことに，マッケンロートの深い理論的洞察力があり，史的社会学的人口理論の実証面での意義もまさにここにある。彼の neue Bevölkerungsweise が，工業化段階での人口様式であり，成熟した工業社会での人口様式がいまだ明らかにされていないこと，またこうした将来のことはさておき，1930年代以降に生じた西欧社会における人口学的変化についても充分な説明は与えられていないといった不充分さはあるにしても，人口様式という理論的にすぐれた着想の上に立ちその実証面におけるキズも非常に少ない彼のここでの分析は，全世界にわたる Demographic Data を駆使した理論的実証的人口研究のすぐれた模範であるといってよいだろう。表現理解という社会学的基礎視角における非合理性への指向と人口統計的アプローチへの反撥にもかかわらず，表現連関としての人口様式の実証研究における彼の分析は壮大な人口統計学的資料を駆使した鋭い理論的分析として，科学的合理主義を少しも損ってはいない。否マッケンロートの説明がいかにも理路整然としており，かつ統計的事実を巧みに操作しているため，現実の人口現象というものが如何に複雑多端な様相を呈しており，その統一的説明が如何に難かしいかを身にしみて痛感している筆者などには，かえってそのために若干の危惧の念を抱かざるを得ない程である。世界各地域の諸民族の近代的人口様式への順化過程を位置づけた第3図などは，彼の思想の具体的図示として甚だ便利なものであるが，マッケンロートの表現をかりれば，これも特定の歴史的社会的局面における発展傾向であることをつねに念頭におく必要があろう。この人口学的改鋳がどこまでつづくか否かは，このような人口推移を支えている歴史的社会的局面がどこまでつづくかにかかっているからである。

この部分の問題点については，すでに注49）で，彼がこの人口学的改鋳の終極に想定する人口様式の分化の消滅という均衡論的思想について筆者の疑問を提示しておいたが，さらに今一つの疑問は彼のいわゆる局面経過加速化の法則についてである。第2表における彼の統計的事例の内にはすでに彼の主張と矛盾するものが存在しているが，[107] それよりも問題は，何故に人口学的改鋳にひきこまれる時期が遅いほど改鋳過程は短縮せねばならないかという説明がマッケンロートによって全然なされていないことである。これでは人口過程を，それを制約している史的社会的局面と切り離して考察する自然主義的思考様式（あるいは統計主義）に彼自身が陥っていると思われても仕方があるまい。むしろこのような法則の呈示に満足することなく，その受容の時期と歴史的情勢の変化がもたらす人口過程への影響を忠実に分析することこそ，マッケンロートの史的社会学的人口理論の態度でなければならない。

さて以上の alte ～ neue への人口様式転換の統計資料にもとづく解明につづく新人口様式の構成要因の分析こそマッケンロートの社会学的人口論の実質的部分をなすものである。

マッケンロートは新人口様式の形成の支配的要因である社会的要因を，社会制度的要因（sozial Dürfen）と個人的要因(persönliche Wollen)とに分けて説明している。ここで注目されるのは，この説明が一般の人口現象の社会的あるいは文化的研究にみられる要因の並列的な列挙とはことなり，その背後に素朴ではあるが人口様式の決定要因に関する社会学的概念図式が前提されていることであろう。すなわちマッケンロートはここで，人口様式を規制するものを，生殖構造に関連した人間の行動

にあるとみ，さらにそれらの行動あるいは行動様式決定の要因を大きく社会制度的規範のレベルにふくまれるものと個人的意欲のレベルにふくまれるものとに分け，この二つのレベルにおける社会的規制要因の変化から新人口様式の形成を説明しようとしている。この人口様式決定の二つの社会学的レベルの内，社会制度的レベルは，社会制度あるいは規範により，個人の意欲を問題とせずに行動の規制が働らくばあいを包含し，個人的レベルは個人の心理への影響による主体的意欲の形成を通して行動の変化が起るばあいを包括する。もともと彼は人口過程に影響を与えるものとしてこの他に生理的要因と経済的局面を考えていたが，この内生理的要因は新人口様式の形成において見るべき役割を果しておらず，また経済は一般に環境的な意味しかもたず，経済的過程の変化は制度と心理という直接的規制要因の二つのレベルへの影響を通して間接的にしか作用し得ないと考えた。なお性および家族倫理も，これらの二つのレベルにとくに大きな影響を与える精神的基礎として考慮されている。新人口様式の形成が彼のこのような理論的枠組によって充分説明しうるか否かはともかく，こうした社会学的概念図式のもとに新人口様式形成の社会的要因を分析していることは，マッケンロートの人口研究が，実質的にも単なる人口現象の社会的研究と区別された社会学的研究であることを示している。社会学的人口研究と称せられるものの内，理論的研究の多くは，余りにも抽象的思弁的な理論認識の所産でこれを裏づけるにたる検証の用意が充分でないか（Comte, Spencer Giddings），あるいは，人口資料を社会学的理論の証明材料として利用するものであり（Tönnies, Heberle, Durkheim），一方，その実証的研究部門においては，人口統計的資料整理の域を出るものが少ない現状において，[108] マッケンロートが，表現理解という社会学的基礎理論の上に立つことにより，人口現象の社会学的分析の理論的方途を提示するとともに，具体的な人口過程の変動の説明にも，ともかくこのような社会学的枠組を提示しえたことは，人口の社会学的な実証研究における理論と実証の両面にわたる大きな貢献であり，社会学的人口研究における理論と実証との相即という困難な課題の解決に対しても大きな光明をなすといえよう。

さてこのような社会学的枠組によって，彼がいかに巧みに新人口様式形成の社会的要因を分析したかは，ここに改めて説くまでもあるまい。新人口様式の形成に関するマッケンロートの証明は，彼に先行する多くの文化的社会的人口研究の成果を充分にふまえながら，それらをはるかに上廻る理論的水準に達し得たといって過言ではない。

だがこの人口過程に関する枠組の設定は，新人口様式に関するすぐれた社会学的分析を生み出すと同時に，マッケンロートの人口理論の一面における限界をも形成したといえるのではなかろうか。つまりマッケンロートは社会学的要因の意義を強調するの余り，新人口様式形成の直接要因ではないにもせよ，これと密接な関連をもち多くの影響を与えた経済的諸要因の作用の大部分を，この分析範囲の外においてしまったとはいえないだろうか。

たとえば，マッケンロートは，新人口様式の本質要素である結婚後における個人の自発的意志による出生制限の原理，つまり家族数の縮少への個人的意欲，の形成にあずかった要因の第一として，消費規範と消費競争をあげている。ここで彼は生活水準の上昇という経済的条件そのものではなく，それが主観的にどう体験されたかという心理的条件こそが出生制限の直接要因であったこと，つまり近代社会における出生制限は，まさにこのような客観的生活水準の上昇過程における，主観的な消費規範のこれを上廻る上昇によって生じたことを説いた。この指摘が彼の Mombert 批判の重要な論点であったことは前にものべた。マッケンロートの以上の指摘は Mombert 理論の欠陥の一面を鋭どくついたものではあるが，ここではさらに，消費水準を上廻る消費規範の形成を生み出すような生活の経済的諸条件との関連が果して問題とならないだろうか。個人の主観的意志が行動決定の直接要因である

ことは，それが経済的条件をはなれた独立要因として作用することを意味しない。そして経済的なもののいわば主体的濾過機構としての心理的体験それ自体が，経済的なものによって多くの規制をうけている特定の社会経済的 Einordnung の内にある人間のそれであるとすれば，経済を Situation として行動研究の社会学的枠組の内から捨象してしまうことは当を得ない。近代的産業社会の形成が，新人口様式の直接の規制要因ではなかったにもせよ，その成立に対し重大な影響を与えていたことは，マッケンロート自身が，この新人口様式の形成要因の説明の行間において明らかにしているところである。もちろん経済的条件がすべてを規定するものではなく，マッケンロートの指摘したように，経済の人口への影響が，生殖構造を直接規制する制度や心理を通して作用することは明らかである。人口過程に対する社会的要因と経済的要因との作用の仕方を明確に区別したことはマッケンロートの重要な貢献であり，安易な経済決定論の誤謬から我々を防いでくれるが，社会的要因の直接的役割を強調するの余り，すべての das Ökonomische を全く人口様式の説明要因から除いてしまったことに，筆者は大きな不満をもたざるを得ない。[105]

ところでマッケンロートのこのような過度の社会学主義は，Malthus, Mombert などを中心とする人口の経済的把握に対する批判反撥に由来するものではあるが，同時に彼自身の人口と経済との関連に関する把握それ自体にも問題がひそんでいるように思われる。人口と経済との関連の問題は筆者の専門領域をこえた問題ではあるが，マッケンロートの社会学的人口論にかかわる範囲内で，以下彼の経済把握の問題点を探ってみよう。

〔注〕105) Mackenroth: Bevölkerungslehre 407頁，および Weltwirtschaftliches Archiv Bd. 75, Heft 1. の Mackenroth の論文: Die generative Struktur von Bevölkerungen und Sozialschichten の注解から，generative Struktur に関する研究文献を掲げておく．

Werner Conze: Hirschenhof, die Geschichte einer deutschen Sprachinsel in Livland. Neue deutsche Forschungen, Abt. Volkslehre und Gesellschaftskunde Bd. 2, Berlin, 1934

Werner Conze: Agrarverfassung und Bevölkerung in Litauen und Weissrussland. I. Teil: Die Hufenverfassung in ehem. Grossfürstentum Litauen, Deutschland und der Osten, Bd. 15, 1940

H. Haufe: Deutsches Volkstum in der Bevölkerungsentwicklung des östlichen Mittereuropa, Berlin, 1935

H. Haufe: Die nordostdeutsche Bevölkerungsbewegung 1817–1933 Archiv für Bevölkerungswissenschaft und Bevölkerungspolitik Bd. V, 1935

H. Haufe: Die Bevölkerung Europas, Stadt und Land im 19 und 20 Jahrhundert Neue deutsche Forschungen, Abt. Volkslehre und Gesellschaftskunde, Bd. 7, Berlin, 1936

H. Haufe: Soziologische Probleme in der europäischen Bevölkerungsentwicklung des 19 und 20 Jahrhunderts, Archiva Pentru Stuita, Si Reforma Sociala, 1936

Gunther Ipsen: Landvolk, ein soziologischer Versuch, Hamburg 1933

Gunther Ipsen: Gedanken zur soziologischen Erforschung des Deutschtums in Ostmitteleuropa, Deutsche Hefte für Volksforschung, Bd. 卅, 1933

Gunther Ipsen: Bevölkerungslehre. Handwörterbuch des Grenz und Auslandsdeutschtums, Bd. I, 1934

Gunther Ipsen: Die Bevölkerung des Ostseeraums, Altpreussische Forschungen, Bd. 14, 1937

Gunther Ipsen: Landvolk und industrieller Lebensraum im Neckarland, Raumforschung und

Raumordnung, 5. Jahrgang, 1941

Gunther Ipsen: Agrarische Bevölkerung, Archiv für Bevölkerungswissenschaft und Bevölkerungspolitik, 1941

H. Klocke: Deutsches und madjarisches Dorf in Ungarn, 3. Beiheft zum Archiv für Bevölkerungswissenschaft und Bevölkerungspolitik, 1937

Hans Linde: Zur Volkskörperforschung.
Archiv für Bevölkerungswissenschaft und Bevölkerungspolitik, Bd. Ⅷ, 1938

Hans Linde: Preussischer Landesausbau.
Ein Beitrag zur Geschichte der ländlichen Gesellschaft in Süd Ostpreussen am Beispiel des Dorfes Piassutten, Kreis Ortelsburg, Archiv für Bevölkerungswissenschaft und Bevölkerungspolitik, Beiheft 72, Leipzig 1939

Hans Linde: Die generative Form spezifischer Bevölkerungen, In: Raum und Gesellschaft, Referate und Ergbnisse der gemeinsamen Tagung der Forschungsausschüsse, 《Raum und Gesellschaft》 und 《Grossstadtprobleme》,
〔Forschungs und Sitzungsberichte der Akademie für Raum forschung und Landesplannung, Bd. 1, 1950〕 Bremen Horn, 1952

106) 前掲の Generative Struktur von Bevölkerungen und Sozialschichten による.

107) マッケンロートの局面経過加速化の法則を言葉通りに解釈するならば，国の順序は出生率が30‰に達した時期でならべるべきであり，従って下の三国はドイツ・ハンガリー・イタリアの順になるが，そうすると低下に要した期間は16年・14年・18年となり，マッケンロートの言う通りにはならない.

108) 中島龍太郎：デモグラフィと社会学，人文研究7巻10号を参照.

109) 中島氏は農民出産力の社会学的研究において，農民行動がそれによって規定される三つのレベルとして，(1)主観的意識—直接的要因，(2)制度的体制—媒介的機構，(3)経済的事情—基礎的条件をあげ，この三つのレベルにおける要因・条件から出産力を検討すべきことを説いているが，筆者もこの見解に賛意を表したい．経済的条件を説明環に持ちこむことは，決して社会学的分析の意義を少さくすることではない.

中島龍太郎：農民出産力の動向について，日本社会学の課題所収.

3 人口と経済

人口と経済との関係の把握は，マッケンロートの人口研究の重要な問題点をなしていた。史的社会学的人口理論の形成をめざすマッケンロートにとって，人口と経済の問題は決してその実際的・理論的関心外のものではなかった。

後掲の文献目録を一覧することによってもわかるように，彼の最初の学問的関心は，はじめ数学的理論経済学にむけられ，やがて一連の経済政策的諸問題が彼の主要研究領域をなすに至ったが，このような経済学的研究は，むしろ彼の学的活動の中期以後にあらわれた人口問題や社会学・社会政策・社会調査に対する探究とならんで，その生涯の最後に至るまで一貫して彼の重要な研究分野をなしていた。[110] 彼にとってはむしろ経済学こそ本来の活動舞台であったともいえるのである。Bevölkerungslehreにおけるその叙述の量的比較からいっても，第5章の人口と経済は，第4章の社会学的人口理論の分量に優に匹抗している。単にこのような意味においてだけでなく，人口と経済との関係把握の理論的水準の高さにおいて，また人口と経済とのあいだの現実的関連に対する多くの新しい問題指摘という点でも，それは彼の社会学的人口理論の提唱とならぶ人口論への大きな寄与といってよい。

人口と経済との関係の基礎的把握におけるマッケンロートの理論的功績は，両者のあいだに，性質のことなる作用連鎖にもとづく二重の関連の存在を指摘したことであろう。すなわち彼はこの二分論において，Malthusにおけるような人口と経済との直接的な自然主義的対置を批判し，現実の人口と経済とのあいだの相互作用は，そうした物体的作用連鎖によってではなく，精神的霊的な作用連鎖，すなわち人口様式と経済様式を通しての歴史的な関係として把えらるべきことを明らかにした。

人口と経済との直接対置は，Malthus以来の経済学的人口理論の主流をなす伝統的思考法であり，出生力の減退が生活水準の上昇と並行して生ずるに至った19世紀の70年代以前の過剰人口問題の説明は，ほとんどこのような設定によってなされて来たといっても過言ではない。この人口増加を制約する経済的絶対枠は，そのドイツ的用語法においては Nahrungsspielraum とよばれていた。Nahrungsspielraum という概念がその一面における人口論に対する大きな寄与にもかかわらず，否むしろその故に，経済的人口論の内容を人口対食糧，人口対生活資料といった形の扶養問題の検討のみに局限せしめ，いかに人口と経済とのあいだの現実的連関の多様な側面に目を蔽わしめることになったかを考えるならば，マッケンロートのこの指摘の意義は非常に大きなものといわねばならない。いわば彼のこの指摘は，人口論を Nahrungsspielraum の呪縛から解放し，経済的人口論の基礎的視点を大きく広げかつ前進せしめる大きな可能性をつくり出したといえる。

Malthus からのマッケンロートの理論的前進がいかなる意義をもっていたかは，たとえば西欧の中世社会における人口と扶養空間とのあいだの潜在的緊張の把握[11]にもっとも明瞭にあらわれている。すなわち彼は，一見 Malthus ごのみのこの指摘において，Malthus のような，なんらの社会構造的制約をもたない人口増殖と経済的空間との直接対置を行なわず，Hufe 体制，中世的家族制度，キリスト教的社会倫理，領主的人口規制などの一連の社会経済的構造ならびに社会文化的制度・規範の諸制約を通しての人口増加と扶養空間との関係をとらえていたのである。

マッケンロートの設定したこの新らしい理論的視野に裏づけられて，人口と経済との現実的関係に関する彼の把握も豊かな内容をもって展開されるに至った。1）Urarmut 2）工業化以前のヨーロッパ農業の段階 3）工業化段階の資本集約経済という三つの歴史段階による把握も，理論的にはこの人口と経済との関連に関する新しい作用連鎖という視角のもとではじめて可能となったといえる。そしてここから，alte から neue への人口様式の歴史的転換を中心とするあのすばらしい西欧社会の人口様式の分析が生れることになる。

もっともマッケンロートはこの人口と経済との現実的関連の分析において，第1の関連すなわち彼のいわゆる歴史的過程の現実弁証法の考察を排除しているわけではない。むしろ理論的設定におけるとは逆にその現実的分析においては，第1の関連の方に彼の分析の重点がむけられていたと考えられる。そこからどのような問題が生れるかは後に明らかとなろう。

先にあげた人口様式の三つの段階に関する分析の内，第一の Urarmut は原初段階に対する理論的想定としていわばつけたりであり，実際には第二の工業化以前のヨーロッパにおける資本粗放的経済と工業化過程にある資本集約的経済における人口と経済の現実的関連の検討が第5章の主要部分を構成していたが，人口と経済とのあいだの第二の作用連鎖を明らかにするという意味では，むしろ工業化以前の段階でのいわゆる alte Bevölkerungsweise の分析の方がすぐれており精彩にとんでいたように思われる。もっともここでも彼は経済人口学的方程式によって人口と経済との現実弁証法的関係を表現し，工業化以前の資本粗放経済の段階における人口増加の経済的可能性の理論的検討を行ない，過剰人口，過少人口という通常のまったく静態的な概念に対し，現実の歴史的過程における動態概念として ökonomische Sterilisierung•Bevölkerungsvakua という新概念を提示している。だがその分

析の中心は前工業段階での人口と経済との緊密なかみ合わせの摘出検討にあったとみてよい。ここに示された人口（alte Bevölkerungsweise）—経済（Hufe 体制）—社会（家族制度，婚姻規範）—政治（領主制）—文化（キリスト教倫理）の間のすぐれた調和的関係の指摘は，単に人口様式と経済様式との関連ということにとどまらず，前工業段階の人口様式がいかに社会経済政治の全構造および社会文化的規範とも固い結びつきをもっていたかを我々に教えてくれるすばらしい分析である。さらに頭割りの土地分割を基本とする東欧的共同体と，領主制と Hufe 体制を中心とする西欧的共同体における前工業段階での人口様式の違いもまたこのような社会経済の全体構造を媒介にした人口と経済との結びつきの把握によって明らかにされ得たのである。このように前工業段階における人口様式の研究においては，人口と経済との第二の作用連鎖は充分その説明環としての役割を果していたといえる。

だが工業化段階での人口と経済との問題についてはどうだろうか。マッケンロートはここでまず工業化段階における人口と経済との関係の重要な歴史的変化として，経済人口学的方程式によって表現しえた人口と経済との単純緊密な調和関係が消滅し，より複雑かつ弛緩した関係に転化することを指摘する。この変化は Hufe 体制を媒介とした土地と人口数とのあいだの調和の消滅および資本集約経済の成立によって生じたものである。そこで彼はこの新らしい段階での人口と経済との関係を，資本集約経済のもとでの，新らしい人口増加圏の形成，拡大の面から分析し，それにともなって生ずる人口学的諸問題の検討を行う。

資本集約経済のもとでの人口増加圏の拡大過程に関するこの分析はすばらしいものであるし，またここでそれと同時に指摘されている隘路問題，工業化以前の人口と経済との古いかみ合わせの解消，労働力排除，行政組織部門での労働力の不妊化，なども興味ある分析である。

だが前工業段階での考察とはことなり，ここでは人口過程と経済過程との関連の社会経済的全構造を媒介とした包括的かつ多面的な把握が放棄され，前段階における領主制や Hufe 体制に対応するはずの資本主義的政治経済体制，すなわちその生産関係や階級編成の問題はすべて捨象されて，もっぱら人口と経済との現実弁証法，つまり資本集約経済の発展とともに生ずる扶養空間の拡大とその下での人口学的諸問題の分析のみにその視野が狭められてしまっていることは否めない。つまりそこでは人口と経済との第一の作用連鎖すなわち扶養空間と人口との関係に論点が集中し，彼のいわゆる第二の作用連鎖にかかわる諸問題が無視されてしまっているのである。資本集約経済の発展とともに生ずる一連の人口学的問題，すなわち人口と経済とのかみ合わせの解消，Engpass, Freisetzung, Sterilisierung など重要な意味をもつ問題指摘が行なわれながら，それらの分析が多分に問題の形式的把握に止まっているような印象が強いのもこのためと思われる。

ところで資本集約経済の段階での人口と経済との関連の分析におけるこのような視野の限定は，新人口様式の成立に対する経済学的分析をも放棄させることになった。彼は新人口様式の成立根拠を，新たな人口増加圏の形成・拡大が就業機会を増大させるとしても決して扶養空間の拡大を意味せず，また生産性上昇が消費上昇には転化できても決して人口増加に転化されることのない資本集約経済の発展のもとでの，もっぱら現実弁証法的な要請にしか見出し得ないのである。これはまさに経済と人口との関係に関する Malthus 的思考法に他ならない。1880年代からの出生率低下についての彼のつぎの説明は，彼のこの思想的立場を端的に表わすものである。「この転換を説明するものは経済学者ではなく社会学者である。経済的なものからそれを説明することはできない。ヨーロッパの諸民族はその扶養空間の限界につき当ってはいなかった。」（Bevölkerungslehre 479～480ページ）人口と経済との関連の理論的説明におけるマッケンロートの画期的前進は，ここではまったく忘れられてしまっている。この意味では南氏によるつぎの批評「この部分についてのマッケンロートの特色的な論述

は，マルサス・モンベルトの線に沿うての展開であり，しかもそういう意味においてマッケンロートのこの展開は立派に前行諸家の理論の峰を凌ぎ得たと思う」はまことに当を得たものであった。[112]

かくて，マッケンロートの新人口様式成立に関する説明が何故に社会学的理論でなければならないかの理由もここに明らかとなった。すべての経済的現象を，単なる Situation としてのみとらえ，人口様式の決定要因を社会学的条件のみにもとめた社会学的人口理論は，結局彼の批判の最大目標であった Malthus 的経済把握（Nahrungsspielraum）への恐らくは意図せざる復帰と論理的には表裏一体をなしていたのである。

しかしながらそれは彼の人口と経済との関連の理論的把握における折角の創意を無に帰せしめることを意味する。この矛盾は，人口と経済とのあいだの第二の作用連鎖という彼の把握をさらに前進深化させ，経済過程を単に扶養空間の拡大あるいは資本集約経済の形態的発展という形式的側面での把握にとどめず，資本主義発展の政治経済的総過程においてとらえ，このような経済的基礎条件を土台にふまえた新人口様式の社会経済的説明理論の形成によってのみ解決されるはずである。

マッケンロートの社会学的人口論を，さらに人口に関する社会経済的理論にまで前進させること，これが筆者のつぎの課題となる。

〔注〕110） 彼の学的活動ならびに思想については，つぎの論文を参照.

Erik Boettcher: Gerhard Mackenroth und seine Stellung zu den deutschen Sozialwissenschaften, Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. 75, Heft 1.

111） 南氏はこの潜在的緊張の指摘を，「マッケンロートの思想の内に，食糧範囲への人口の不断の圧迫を根幹としたマルサスの根本的思想が，いかに打ち消しがたい比重をもって潜入し来っているかの証拠」とみられるが，すくなくともこの指摘に関するかぎり，マッケンロートの思想の明らかな誤解であると思う．もっとも第五章の把握全体で通観するとき，マッケンロートが，Malthus 的思考法を完全に清算し切っていなかったことは筆者もみとめるが，人口と経済との関連に関するマッケンロートの分析の貢献を，むしろ南氏とは逆に，マルサス的思考法からの脱却への努力の内にみたい．

なお南氏のマッケンロート批評については，南亮三郎：マッケンロートの人口論，経商論纂，55号，1954年5月を参照.

112） 同上，50ページ.

補録　マッケンロートの著作目録

以下の目録は，マッケンロートが死んだ1955年（本稿のはしがき：85号2ページ：では，彼の生没年が1903～1957となっているが，没年は誤植である。さらに正確にいうと彼は1903年10月14日に生れ1955年3月17日に死亡した。）に，彼が社会学の講座をもっていた Kiel 大学の附属研究所 Instituts für Weltwirtschaft の機関誌：Weltwirtschaftliches Archiv, Band 75, Heft 1. に掲載された彼の同僚 Dr. Erik Boettcher の追悼論文：Gerhard Mackenroth und seine Stellung zu den Deutschen Sozialwissenschaften：に附録としてのせられたものに，筆者が若干の補足を行なったものである。

なお Boettcher の論文は，マッケンロートの生涯に亘る研究活動および彼の思想を，共同研究者としての立場から紹介しており，彼に関する数少ない紹介論文の内もっとも詳細かつ内容豊かなものである。

I 著　　書

Ein Beitrag zum Problem des Protektionismus. Eine theoretische Untersuchung über die Wirkung von Zöllen auf Preise, Sozialprodukt und Volkseinkommen, Geldwert und Wechselkurse. Hallenser Dissertation, Potsdam 1926.

Die Reichweite Halles als Beschäftigungs- und Wohngemeinde. Eine Denkschrift zur Frage der Abgrenzung des Arbeitsnachweisbezirkes Halle. (Beiträge zur mitteldeutschen Wirtschaftsgeschichte und Wirtschaftskunde, 7.) Halberstadt 1928.

Die Entwicklung des öffentlichen Arbeitsnachweises unter der Verwaltung der Stadt Halle 1914—1928. (Ebenda, 9.) Halberstadt 1928.

Theoretische Grundlagen der Preisbildungsforschung und Preispolitik. (Sozialwissenchaftliche Studien.) Berlin 1933. (Habilitationsschrift.)

Tysklands ungdom i revolt. Översättning efter författarens manuskript av Sven Stolpe. (Frontens Bibliotek.) Stockholm 1933.

Die Wirtschaftsverflechtung des Britischen Weltreiches. Unter Mitw. von Franziska Krebs. (Zwischenstaatliche Wirtschaft, H. 12.) Berlin 1935.

In Gemeinschaft mit Andreas Predöhl: Deutschland und die wirtschaftliche Einheit Europas. Ökonomisches Manifest zum Marshall-plan. Rendsburg 1948.

Methodenlehre der Statistik. (Grundriss der Sozialwissenschaft, Bd. 24.) Göttingen 1949. (Erw. Neuaufl. in Vorbereitung.)

Sinn und Ausdruck in der sozialen Formenwelt. Meisenheim/Glan 1952.

Bevölkerungslehre. Theorie, Soziologie und Statistik der Bevölkerung. (Enzyklopädie der Rechts- und Staatswissenschaft, Abt. Staatswissenschaft.) Berlin, Göttingen u. Heidelberg 1953.

Die Verflechtung der Sozialleistungen. Ergebnisse einer Stichprobe. (Schriften des Vereins für Sozialpolitik, N. F., Bd. 8.) Berlin 1954.

II 論　　文

Zollpolitik und Produktionsmittelversorgung. »Weltwirtschaftliches Archiv«, Bd. 29 (1929 I), S. 77—105.

Period of Production, Durability and the Rate of Interest in the Economic Equilibrium. »Journal of Political Economy«, Chicago, Vol. 38 (1930), S. 629 bis 659.

Über den Versuch eines ökonomischen Gleichungssystems auf mathematischstatistischer Grundlage. »Weltwirtschaftliches Archiv«, Bd. 33 (1931 I), S. 163*—177*

Vortrag in: Probleme der Wertlehre. Hrsg. von Ludwig Mises und Arthur Spiethoff. T. 2: Mündliche Aussprache über die Wertlehre im theoretischen Ausschuss des Vereins für Sozialpolitik 30. September 1932 in Dresden. (Schriften des Vereins für Sozialpolitik, 183/II.) München u. Leipzig 1933. S. 67—81.

Ziele und Wege der Geldpolitik. »Weltwirtschaftliches Archiv«, Bd. 35 (1932 I), S. 171*—178*.

Ökonomische Theorie und Liberalismus. Erweiterte akademische Antrittsvorlesung. »Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reiche«, München, Jg. 57 (1933), S. 325—336.

Deutsche Industriepolitik 1933, I und II. »Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik«, Jena, Bd. 140 (1934), S. 54—70, 204—224.

Neuerscheinungen zur ökonomischen Theorie. »Weltwirtschaftliches Archiv«, Bd. 40 (1934 II), S. 224*—234*.

Cartels et politique de cartel dans la nouvelle Allemagne. »Revue économique internationale«, Bruxelles, Année 27 (1935), Vol. 1, S. 211—222.

Neue Formen der Weltwirtschaft. »Weltwirtschaftliches Archiv«, Bd. 41 (1935 I), S. 1—19.

Bevölkerungsprobleme im In- und Auslande. Ebenda, Bd. 46 (1937 II), S. 19*—26*.

Der Marktordnungsgedanke in der Weltlandwirtschaft. Vortrag. »Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft«, Tübingen, Bd. 97 (1936/37), S. 611—628.

Bericht über den Vierjahresplan. »Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik«, Jena, Bd. 148 (1938), S. 697—726.

Wirtschaftspolitik als Verfassungsproblem. Der Konflikt von Marktregulierungspolitik und liberaler Staatsidee in den angelsächsischen Ländern. »Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft«, Tübingen, Bd. 99, (1938/39), S. 64—86.

La situazione attuale della economia teoretica in Germania. »Archivio di studi corporativi«, Firenze, Vol. 9 (1938), S. 83—92.

Zusammenfassender Bericht über die Arbeiten einer Forschungsgruppe am Institut für Weltwirtschaft. Vortrag und Diskussionsrede auf der 5. Internationalen Agrarkonferenz im Mac Donald College, Canada. In: Proceedings of the International Conference of Agricultural Economists, London 1939, S. 288—294.

Die deutsche Wirtschaftsentwicklung im Spiegel englischer Fachliteratur. »Weltwirtschaftliches Archiv«, Bd. 49 (1939 I), S. 101*—117*.

Kritische Anmerkungen zn den Zinsvorschlägen Nöll v. d. Nahmers. »Der Wirtschafts-Spiegel«, Wiesbaden, August 1948.

Der Zins in der kapitalistischen und sozialistischen Wirtschaft. »Weltwirtschaftliches Archiv«, Bd. 62 (1949 I), S. 89—122.

Sozialistische Wirtschaftsverfassung. Möglichkeiten, Formen und Grenzen. Ebenda, Bd. 63 (1949 II), S. 178—231.

Bevölkerung und Wirtschaft. »Jahrbuch für Sozialwissenschaft und Bibliographie der Sozialwissenschaften«, Göttingen, Bd. 1 (1950), H. 1, S. 65—80.

Mitbestimmungsrecht und Sozialismus. »Wirtschaftsdienst«, Hamburg, Jg. 30 (1950), H.

2, S. 9—14.

Internationale Soziologen-Kongresse in Rom und Zürich. Ebenda, H. 10, S. 12.

Die sozialen und kulturellen Folgen der grossen Bevölkerungsvermehrung des 19. Jahrhunderts in volkswirtschaftlicher Beziehung. In: Synthetische Anthropologie. Vorträge und Diskussionsberichte der »Konferenz zur Förderung der verbundenen Wissenschaften vom Menschen« am 23. und 28. September 1949 in Mainz. Im Auftr. der Deutschen Gesellschaft für Soziologie zusammengest. von L. v. Wiese und K. G. Specht. Bonn 1950. S. 164—176.

Strittige Probleme der theoretischen Nationalökonomie. »Weltwirtschaftliches Archiv«, Bd. 64 (1950 I), S. 44*—54*.

Einige soziologische Probleme der Bevölkerungsprognose. In: Abhandlungen des 14. Internationalen Soziologenkongresses in Rom 1950. Bd. 2. Hrsg. von Corrado Gini. Rom 1950. S. 1—19.

Bevölkerungswissenschaft ohne Bevölkerungstheorie? »Weltwirtschaftliches Archiv«, Bd. 66 (1951 I), S. 49*—55*. Dazu ein Nachwort. Ebenda, Bd. 68 (1952 I), S. 11*—13*.

Etat actuel des recherches démographiques en Allemagne. »Population«, Revue trimestrielle de l'Institut national d'études démographiques, Paris, Année 7 (1952), S. 283—288.

Die Reform der Sozialpolitik durch einen deutschen Sozialplan. In: Verhandlungen auf der Sondertagung des Vereins für Sozialpolitik—Gesellschaft für Wirtschafts- und Sozialwissenschaften in Berlin, 18. und 19. April 1952. Hrsg. von Gerhard Albrecht. (Schriften des Vereins für Sozialpolitik, N. F., Bd. 4.) Berlin 1952. S. 39—89.

Familienpolitik in der kleinen Steuerreform. »Sozialer Fortschritt«, Berlin u. München, Jg. 2 (1953), H. 5, S. 109—110.

Bevölkerung und Bevölkerungspolitik. In: Handwörterbuch der Sozialwissenschaften, Stuttgart, Tübingen u. Göttingen. Erscheint demnächst.

L'importance de la limite d'âge dans le rapport de population active — population inactive. In: Études européennes de population. Main-d'oeuvre-emploi-migrations. Situation et perspectives. Ed. de l'Institut national d'études démographiques. (Center européen d'études de population.) Paris 1954. S. 71—77.

Rechtslage oder soziale Wirklichkeit? Antikritik zu einem Aufsatz über die Kieler Studie zur »Verflechtung der Sozialleistungen«. »Sozialer Fortschritt«, Berlin u. München, Jg. 3 (1954), H. 7, S. 161—162.

Mitbestimmung und Wirtschaftsordnung. Der nationalökonomische Aspekt. In: Wege zum sozialen Frieden. Beiträge zur Mitbestimmung und sozialen Partnerschaft in der Wirtschaft. Hrsg. von H. O. Ortlieb, H. Schelsky. (Veröffentlichungen der Akademie für Gemeinwirtschaft.) Hamburg, Stuttgart u. Düsseldorf 1954. S. 88—96.

Wissenschaftliche Vorarbeiten für eine Reform der Sozialpolitik. »Sozialer Fortschritt«, Berlin u. München, Jg. 3 (1954), H. 10, S. 214—217.

In Gemeinschaft mit K. M. Bolte: Bericht über das Forschungsvorhaben »Wandlungen

der deutschen Sozialstruktur, am Beispiel Schleswig-Holsteins». In: Transactions of the Second World Congress of Sociology, Vol. 2, London 1954, S. 92—102.

Art. Bevölkerungslehre. In: Soziologie. Ein Lehr- und Handbuch zur modernen Gesellschaftskunde. Hrsg. von Arnold Gehlen und Helmut Schelsky. Köln u. Düsseldorf. S. 44—90.

Ökonomie und Soziologie. Zur Wissenschaftspolitik in den Sozialwissenschaften. In: Festgabe für Georg Jahn zur Vollendung seines 70. Lebensjahres am 28. 2. 1955. Hrsg. von Karl Muss. Berlin 1955. S. 351—357.

Die generative Struktur von Bevölkerungen und Sozialschichten. «Weltwirtschaftliches Archiv», Bd. 75 (1955 II), S. 1—18.

Bevölkerungsprobleme der Welt. Vortrag, gehalten am 5. Oktober 1954 bei den Hochschulwochen für staatswissenschaftliche Forbildung in Bad Wildungen. (Sonderdr.) Bad Homburg vor der Höhe u. Berlin.

Professor Gini's Literary Criticism — a Rejoinder. Demnächst in «Kyklos», Bern.

Weltbevölkerung und Weltwirtschaft. «Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft», Tübingen, Bd. 112, H. 1, 1956.

Bevölkerung (1) Theorie. In: Handwörterbuch der Sozialwissenschaften, Bd. II, Stuttgart, Tübingen u. Göttingen 1959.

この他尚沢山の書評の類があるがそれらは除く。

III 翻訳・編集書

Das politische Element in der nationalökonomischen Doktrinbildung von Gunnar Myrdal. Aus dem Schwed. (Sozialwissenschaftliche Studien.) Berlin 1932.

Der Merkantilismus von Eli F. Heckscher. Aus dem Schwed. Jena 1932. 2 Bde.

Das Zweckmitteldenken in der Nationalökonomie von Gunnar Myrdal. Aus dem Schwed. «Zeitschrift fur Nationalökonomie», Wien, Bd. 4 (1933), S. 305—329.

Der Gleichgewichtsbegriff als Instrument der geldtheoretischen Analyse von Gunnar Myrdal. Aus dem Schwed. In: Beiträge zur Geldtheorie. Hrsg. von Friedrich A. Hayek. Wien 1933. S. 361—487.

Über allen Völkern, eine Anthologie. Von George Catlin, Vera Brittain und Sheila Hodges. Deutsch hrsg. von Gerhard Mackenroth. Übers. aus dem Engl. von Ursula Maria Mackenroth. Berlin u. Hamburg 1949.

IV マッケンロートに関する紹介・批評論文，書評等

Erich Schneider: Theoretische Grundlagen der Preisbildungsforschung und Preispolitik, Eine Besprechung des Buches von G. Mackenroth, Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung u. Volkswirtschaft in Deutschen Reiche Jg. 58, 1934.

Corrado Gini: G. Mackenroth, Methodenlehre der Statistik, Weltwirtschaftliches Archiv

Bd. 66, Heft 1, 1951.

R. V. Ungern-Sternberg und H. Schubnell: Bemerkungen zu Professor Mackenroths Besprechungsaufsatz, Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. 68, Heft 1, 1952.

Charlotte Lorenz: Eine neue Bevölkerungslehre, Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. 72, Heft 2, 1954.

Ernest Manheim: Sinn und Ausdruck in der sozialen Formenwelt by Gerhard Mackenroth, American Journal of Sociology, Volume 59, Number 5, 1954.

Georg Weippert: Sinn und Ausdruck in der sozialen Formenwelt—zu dem gleichnamigen Buch von Gerhard Mackenroth, Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, Bd. 66, Heft 2, 1954.

Erik Boettcher: Gerhard Mackenroth und seine Stellung zu den deutschen Sozialwissenschaften, Weltwirtschaftlches Archiv Bd. 75, Heft 1, 1955.

Helmut Schelsky: Nachruf auf Gerhard Mackenroth, Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 7 Jahrgang, 1955.

Werner Ziegenfuss: Soziologie als Verstehen von Gestalten im Wandel des geschichtlichen Lebens und der sozialen Formenwelt, in: Handbuch der Soziologie, 1956.

Guido Maria Baldi: Interdipendenza e complementarità della previdenza privata e dell' assicurazione sociale nell' economià della stato modern, Rivista di politica economica Ser. 3, 46, 1956.

南亮三郎：マッケンロートの人口論，経商論纂，第55号，11954.

南亮三郎：人口様式と経済様式，人口問題総合報告書，第一集，毎日新聞社人口問題調査会，1956.

Gerhard Mackenroth's Population Theory (4)

YUICHI MINAKAWA

(Continued from No. 87)

Mackenroth's population theory has its basis on the sociological frame of reference of *Ausdrucksverstehen* and it is an excellent example of population study both as a theory and as an empirical study. His opinion of *Ausdrucksverstehen* which forms the theoretical basis of his population study has a notable sociological significance in its criticism on the rationalistic and atomistic social interpretation by Max Weber, but his stand is too strongly tended toward the irrationalistic side of the meaning and still contains much room for further development in theoretical construction.

However, his establishment of the category of *Bevölkerungsweise* in the population study is an original endeavour and it capacitates the unified sociological explanation of population phenomena, and can be noted to have contributed much to the theory and the empirical study of population. By applying this category to the population history in Western Europe, his historical and sociological theory on *Bevölkerungsweise* of Western Europe was formed, which explains the change in population phenomena in Western Europe caused by the industrialization as the convertion from *alte Bevölkerungsweise* to *neue Bevölkerungsweise*.

Although this study on *Bevölkerungsweise* of Western European societies is noteworthy as the sociological interpretation of the population phenomena, the lack is seen in ample consideration in basic economic conditions which influence the population phenomena. The author considers that this is due to the incompleteness in practical application of the theoretically comprehended interrelation between population and econmy on the part of Mackenroth himself.

In fact he divides the interrelation between population and economy in two kinds and criticizes the Malthusian way of thinking which directly relates population and *Nahrungsspielraum* as the way of thinking which is affected only by one of his two kinds of interrelation, namely, *körperliche Wirkungsketten*. He considers that, in practicality, the determinant of the interrelation between population and economy is rather of the other kind or *geistige Wirkungsketten*. This idea of second *Wirkungsketten* was a great contribution of Mackenroth to the theory of basic relation of population and economy.

This way of thinking is sufficiently applied in the analysis of the interrelation between population and enonomy at the stage of *kapitalarmen Wirtschaftsweise* in pre-industrialization period, but the interrelation between population and economy in modern *kapitalintensiven Wirtschaftsweise* stage is analysed solely in terms of the first *Wirkungsketten*. The reason why he recognized economic phenomena simply as the situation in his sociological population theory and excluded the phenomena from the explanatory factors of *Bevölkerungsweise* was because he could not entirely get rid of the influence of the Malthusian way of thinking or the emphasis on the first *Wirkungsketten*.